

912.3

力

春日就神
葵上

穢通
紅葉栲

華教安小町
山止安

關寺小町
善畧

通小町
藤



○春日龍神脇三人 角帽子水衣杏

月のゆく姿腰帯扇珠紋を眺むる目此

の系玉やまをおるゆんは梅尾うのめのめ

恵法師をゆくは我は入り唐の渡り天ののめあり

にあるは山の崎の為に唯今 まるは日の北の山の

1 曲の系玉宿は住作 たの上 まるは山の崎の為に唯今 まるは日の北の山の

取らぬはてく まるは日の北の山の崎の為に唯今 まるは日の北の山の

春日

乃事とあるは救世の事なりと云ふは
三三三と云ふは救世の事なりと云ふは

く... 人... 様色...

... 今宵... 説法...

乃... 天竺... 麻...

伽那の成... 説法...

の入... 説法...

将... 説法...

... 説法...

下... 上... 時... 大地震...

... 説法...

... 説法...

大地震... 説法...

... 説法...

... 説法...

又... 説法...

引はさしく平地小波瀬をちて佛の
 舎座不出来して四法を種はさるる其
 分妙法那羅王又持法那羅
 王樂乾園彼女王樂言乾星彼王
 美波雅阿修羅王羅雅阿修羅王乃
 垣沙の眷属引連く是は如く
 有列をり塔勢をすらまは波瀬の神

く白妙のまや田の系乃波瀬白玉
 舞の縁のをさもさうつ海系や仲の
 えかま月れ山系の依保の川つふうるを
 紫の八大勢王乃大勢王八の冠をかこふ
 け取春日神の月れ乃雲にのかり地
 おりりておろの神をもあてまよや摩那の
 誕生神の法に法ぬ林の入城をく終りて

その月影をささうとさひ照るからと雲
井は夜ふたたらふまわら酒やに皮ゆ
ひまらうをな酒種れまなく
あ

笑も俄お日くれぬあふまうとせやる

酒え少くしてあはれをわさまへまはひ

小籠くふくして一枚の塵式う海のもろ

あもをもひひも誰かとも塵をまひ

さへまはりのとありあはれまわらわ
わの耐柔
ま指衣

大谷豊平 流木の夜うあ頻つら小あう

あきこれ種れあもとさあまも何もなくま

あきんも夜夜ま鈴の舞市灯の光を

んもふらう種まひんを流まら酒小社

あをるまは灯をなすはあれあもあ

あき種はまねりあうりともうりあ

△
か
ら
の
し
ら
し
と
し
ら
し
と
し
ら
し

あはれなる御書所を承りて右へ今迄
かたじけなく御書所を承りて右へ今迄
を思ふに御書所を承りて右へ今迄
かたじけなく御書所を承りて右へ今迄

かたじけなく御書所を承りて右へ今迄
を思ふに御書所を承りて右へ今迄
かたじけなく御書所を承りて右へ今迄
を思ふに御書所を承りて右へ今迄

かたじけなく御書所を承りて右へ今迄
を思ふに御書所を承りて右へ今迄
かたじけなく御書所を承りて右へ今迄
を思ふに御書所を承りて右へ今迄

武家や商人愛ふして 情物より月事前
 日上 天地ひらき物り志より 舞言はれはあそすかを
 かれ今書き之り綱乃未れく 妙なるんを
 感する者ふかむふ法をよむるそとてさる
 居の筆本ふまらま違ふそれとも名傳
 までかきます極ふ若ふらり書き之を
 ひの丸珠の神来秘的て旅立元まき傳く

三

率都染小町 脇僧人 角帽子水尻腰帯
肩珠杖持玉掛

山をわき見ふ隠家北山 浅衣にこれの
 海をやらるるん わき見 老翁野值山此

少つとて此の靈佛愛社兼務の為唯と邪

今より此 史系佛ハ既小きら後弘ハ末也

中 ぬおす愛社中ある小生はそ何をうけ
 思ふへをたましく交りて人男をうけ

思ふへをたましく交りて人男をうけ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

の智慧 西より来り 善あり 妙心
とつちを 善くあり 妙心あり 植木
あつちを 的境まじり 基よりあり
四 富を来つ物な交時と佛と交りて
てあり 上 本より善病の凡まをくす
くりんる北方使の海を渡るの舟なまは
運海なりと云ふあり とも交りてせを海に

まをれる物人も 佛のうへにお地あり
云々礼し 汝へち 我をを耐りてえが
て幾まの奇をよむ 修業はらあり
かうあり 妙心あり 妙心あり 妙心あり
支六倍の倍乃教化やく 此は是に
ふあるを馬人わての 妙心あり 妙心あり
と云ふあり 妙心あり 妙心あり 妙心あり

由して我輩も其後をたぬと云ふ事あり
被と袖もあつたやうに今も此の如く
らひ漢書に人の物もあつた時分
又程礼の人ははまぐちうらやま
あつたすへのふお侍のふ 何よりそ
僧は出町へ行くよりあつた ねと
出町は何とてうつあつた事をもいふ事あり

出町とて人の物もあつた時分

たのむ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
月夜に座をあらたし夜乃の如く
て今百年にたると云ふ事ありと云ふ事あり
人ありと云ふ事ありと云ふ事あり

成者のつとむる事ありと云ふ事あり

一人の物ありと云ふ事ありと云ふ事あり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red circle and red lines, highlighting specific parts of the text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red circle and red lines, highlighting specific parts of the text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

水精をうづねつゝ雲輿の車にまをれ
下りてあざらしてまきこゝろの枝はづまや
此内におくハ世乃神の志とねれおきや
なりし男をまじらむ今いふおあれらむ
を發し康あむ 関寺の清のしあ
目 諸行無常とはつるも老牙みまも
あし 海坂の山風乃乞生減法の理りま

えいんえおを落馬あおのちしんまをるる
まこれうお初まなすしつ業を保ても垣
まろくやまのまも折くに表あゆむて強
かす強かぬハ婦の身なまじらむあまの
男乃よりゆめ果を出しき いふむか七

夕の紫むくお入いん 七
唯しゆまをりやせ 七夕の感系竹のま

一詞 ぬくもへぬれぬまおまふお清の文

以指おのりともおのりまを指してありん

りふも又まうらもといひいふおは因書

りふものりふもを指してありてい 毎日

二のまを本物指してありまの志をい

まのりふおのりふの敷 本物指して

目 運 ままのりふもをいふおは因書

出 運 ちまのりふおのりふの敷 本物指して
 此 下 ままのりふもをいふおは因書
 里 下 ままのりふもをいふおは因書
 し 下 ままのりふもをいふおは因書
 海 下 根芥のりふもをいふおは因書
 狂 下 舞のりふもをいふおは因書
 り 下 ぬれぬれ 上 ままのりふもをいふおは因書

あゝ死靈のさうかひも 梓に無き世なりと

中七段

まやとあひ 登久 梓ふしのけいへ

天徳澤地徳澤内外徳澤を根徳澤

らり人古今我ららるる徳澤のあまの

面泥眼唐織のうりへ

三乃 尊多尊發扇

車に法うた火室の肉をわぬん

夕影の宿乃屋建車屋るかゝるきさう

ヨシ

あし

かめがれし 海半の車乃うらふ
牛の車北の海や難ひな海ん
よそ梅の車の梅乃とくち紙のまを
おぼしき人君の不定まをを泡津の
世のなまひの世の世のあまのあまの
あぬうあひかなまを乃海ふ人の眼
程もひくもれもやぬらひせめくも

あつて慰むと様乃弓小急空のもろ
影連ぞいななり歩 慰み初めやと見え
も悲ひ車乃我際歩月をいなるああを
と月をいなるああを月をいなるああを
えいけりふの様乃弓たうらまづふ立
寄海をわくせん 様乃弓の責
いけそや様乃弓た善いづくそむつ

このまじり 下六

まのりやうつまらふぬさきと
あけきいふんあし 神子 上カカリ
あぬ上臈の被も車にぬきまて海にあま
女房とわかしき人の半らぬき車たぬ
おちつとあらあくともあまはらうらうらよ
とあうらう人あくわらん 大后 ちかひ
推多りて山唯つものまを山あみあま

ては世お海一まのりかろくまは道此
雲乃彩より也光るそを映らん
て葉束の露と消えたるを道は
うらめしやまにうらめしや
若かりお女もまの彩も
其面彩も飛しや
大夜

車うらのせ陽を揺るふよ
大夜

舟漕りまの女八橋川おの舟りお船入
羨の上のわ物のけり外にゆるいり
舟お舟乃の舟り
山伏よきシテサ辱板わさ
水衣大口扇珠投り九識の窓乃第十
繫れ舟乃舟りお瑜伽の法水をた
三密乃因と流すと知お
いふ家りのそ
いふうな海は使す

そが、列行乃子細乃以何人と...

大何人と... 大...

何人と... 大...

何人と... 大...

何人と... 大...

何人と... 大...

何人と... 大...

わらわし

行者、加持お美んと役の行

者の位をつき胎金部乃器と七宝

乃露と拂ひ一藤盤に石淨をへつ

出得乃装束赤糸の珠教乃以たりを

上ニ...

東方不降三世の王な...

面ハシヤ長カ...

何人と... 大...

△
是は
小佳
さひ
ぬ

引
引

○紅葉特作り物

西小西万有蔵

時雨のそく紅葉のりく
あつらん△
とらそを
まのそり
てなれ
ひと

Handwritten text in Arabic script, likely a musical score or liturgical text, featuring black ink on aged paper. The text is arranged in approximately 10 lines, with red markings (possibly accents or notes) interspersed throughout. A prominent horizontal line is drawn across the first line of text.

Handwritten text in Arabic script, likely a musical score or liturgical text, featuring black ink on aged paper. The text is arranged in approximately 10 lines, with red markings (possibly accents or notes) interspersed throughout.

伏

五

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

五九
才

○山邊

脇男スウ小刀扇ト是男スウ

了五廿下葛帝衣威扇

上二二二二二

ふ記老そ中

彩打む

佛の書

袖人

是部方小住居する者あり

相見三是小海ら山方八部小徳也

まさぬ百磨山邊と戸控者て是

山邊の山つらま海とら小中と曲舞に作ら

山邊の山つらま海とら小中と曲舞に作ら
山

まゝあへ〜
横におおひさしく
きふおおれとあも
と 松風とまに
ほおひさるる
那 面山蛇きウケ又イ少冬威
ツホヲリ半切腰帯扇杖
深き那へ物すこの深きわが

お岸を打
ちん屋お花
幾生の昔
何ぞを恨
男懸河
まの工
水引う家

かみかきり
すじ山河のきく交山たりて海きく谷
海してあきく
あまの海水あうりく
うそ月志の光を揚後る人松松
中て風雲集の友を彼家古をまの
きりきとぬ山中にままあくとく
高のく高すりたあうりくを根本丁こうて

かみかきり

山更に出ありは種学そひえて八上末美
掘とあうりく
金梅除おを
あてぬ山の奥にありて
あすさく
自性を愛化して一念化生の境あり

て月影小舟をこぎし那西のあたる時を
はる空を仰ぐに似はあきて世はあやが
悩むまのまを挽あるま御あまのえ生か
生阿まを山にたわあるま柳の緑をいれお
れまをえ人あふあをま時山砂
の推後小舟おの法体しを荷小舟を
か一月らりまお山をままて送あ

まあるまを時を歌のいまをた
つま小舟の枝のまをり紡織の富
小舟をまを助る葉をのまの
あまのぬを人のまをひまを
蝉の夜あまのぬ袖小まを
の月小埋ま持まを人のまを
まを詳乃砥小まのまを

二二
上の
の

言物をうも我を因そまを此かひく
色あかしくあふさるあたらしくのたなき
むかしくさうくちびえをかり
つぼまをゆきやれあまうにたて
何あまのまじあわし
ましく雲と波あな海は河様あま
人さうし天おの海くか光ち地お

くいら六肝中おさう海うま
と青おの物入ゆんく
柳花は大唐乃天物れま後吾常坊と
我事あり
あふの親念をうなせ得まゆやくさ
字そくう一佛ぬきありとせをり
りやうらふらお生海とまう

大徳と赤み糸
法被半切腰帯羽圍

三ふりく

白 志山程水花公也

小志山程水花公也

中の普座をさうハもやと云ひの

月をもちや出漁小なりて煙電の浦云

海を海又ふれを隆奥をいつくハあまや

煙後のうら思くわ海を身たふ人

毛いもや定めあふ人もすあ海多た西

尉三光水衣
勝等三光

照月波をかし書ハ七首を杖の家申
た海客をう川共煙電乃月と却の
客申之那 若妹ハ書身と云て不を
かきありそりあ志くか若書との後里
そまぬ海年乃く 志を遠へ杖を
そ念く海乃風まそ色わ身れと
ふそし海増別衣袖さむき浦をの

日下
室をかみし建も月乃をんて海に電乃
浦さひくも蒸もつる汐の世まてと地
志ま老の波も海を原んあつ着あしや
志くやさひもあつ入るとおへると甲斐
之流乃浦の鳥もまのこははるまあり
唯今の山物波も海はして作
ましくも海をく海山もま皆なる

かき^{ひり} くろく ^た ^{えん} ^は ^ま ^る ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ
おろく ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ
善羽山 ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ
あま善羽山 ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ
たれと讀くまもお坂山も程ちくふようの
らめ ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ ^あ ^ま ^る ^い ^ぬ
たあめくふあままお坂乃山善羽乃



の心心とて心美美香香ハハ池池色色のの本本小小者者一
 美美香香ハハ下下北北波波小小者者一
 物物乃乃よよののヤヤ多多也也なな変変種種ももききああて
 月月之之ももやや美美新新ににああままええゆゆくくのの雲雲をを
 ありありとと物物色色ハハ先先陰陰小小ししそそののままくく月月の
 都都小小入入ああふふああそそああいいああららなな妙妙をを北北面面
 三三ももやや名名妙妙也也北北面面のの



此本者下掛り新板改正

并衣裳付秘蜜之抄子

章句写之全開板不也

正徳四甲午曆弥生十日

新町通下長者町上几所

谷口七九番門

洛陽書林

伊勢や

七郎兵衛



